42回生　気になる記事を共有しよう　2020．6．29分

文化

つぶやく短歌　コロナの時代に　4

歌人　大松 達知

切り離せない学校と生徒

6月。多くの学校が再開された。

私は都内の中学高校の教員。4月、5月はオンラインホームルームで生徒たちの顔が自室のパソコン画面に映った。ふだんは芋焼酎を飲み短歌を作っている机の上。自分の顔のほんの50㌢くらい先に彼らの寝ぼけ顔があった。こちらも短パン姿。映らないけれど。やあやあと素を見せ合う感じがした。

6月に入って教室で生徒たちとひさびさに会った。生身の彼らは目の前にいるのに、かえって距離が遠い気がした。いや、やっぱり近い。身体の存在感は大きい。しかし、その有り難さにもすぐに慣れてしまった。

担当の英語では、5月中は授業動画を配信した。ときに深夜ラジオのタレント気取り。けれど、学校再開後も生徒同士の英会話の練習はしない。マスクをしたまま英語の歌を歌うけれど、いまいち盛り上がらない。

英語の〈スクール〉に授業の意味があるように、学校活動の中心は授業だ。しかし、生徒の立場からするとそうでもない。机の上に座って友達と駄弁ったり放課後にバスケの練習をしたり買い食いをしたり。そういうすべての時間が〈学校〉なのだ。

ここ数カ月、会社と仕事が切り離された。レストランと食事が切り離された。ただ、学校という場にはけっして切り離せないもっと濃厚な時間や空気が流れていると知った。それは、主役である生徒たちの汗の匂いやナマの声が巻き起こすものなのだ。

〈学校〉よ、早く戻ってこい。

おおまつ・たつはる　1970年東京都生まれ。歌誌「コスモス」編集委員。同人歌誌「COCOON」発行人。娘の誕生と育児などを歌った「ゆりかごのうた」で14年若山牧水賞。他の歌集に「フリカティブ」「ぶどうのことば」など。

画面なら触れる近さにあった顔
だいぶ離れて見下ろしている

じゃれあって入り組む汗も歓声も
ときに怒号もそれが教室

アルコールつけて机を拭いており
生徒の跡がなくなるように

大松達知

6月24日 神戸新聞分

時の流れに身をまかせ
今の時代の色に染まらないと
いけないのも事実です。
(私達の青春時代でさえ歌謡曲
の歌詞によく登場していました)
が 不易流行
学校ってそんな課題がたくさん
ありますね。